

民
俗
文
化
財



民俗文化財 黒石よされ踊元踊

所在地 黒石市

保持団体 黒石よされ振興協議会

黒石市最大の行事に「黒石よされ」がある。「黒石よされ」は、徳島の阿波踊り、岐阜の郡上八幡踊りと「日本三大流し踊り」と称されている。

この「黒石よされ」の基礎になっているのが、「元踊」とよばれる古式の「黒石よされ」である。

「元踊」の原形は、三味線・太鼓・鼓各一人の演奏に合わせて一人が唄い、揃いの浴衣・笠・白足袋に草履をはいた約十人の踊り手によって演じられる。

「黒石よされ」の起源は古く、約五百年前に行われていた盆おどりで、男女の恋の掛け合い唄であったといわれている。

黒石の盆おどりが盛んに行われたのは、天明年間（一七八一〜八八）に時の後の家老になる境形さかいぎよ右衛門うえもん（二代目）が、城下町に人を集める商業政策として始めたためだという。

ところで、この「よされ」という言葉の由来には定説がない。①与三郎よさぶろうという人がおり、宴會に招かれたが、十分に酔うことができないため、与三郎が即興的にヨサレを唄ったので、家老たちがその意を解して席をはずした、②酒席から邪魔者と三郎を追い出すために「与去れ」と言った、③豊作で楽しいときには、「仕事をよして楽しく踊りなされ」、凶作で苦しいときには、「このような世の中は早く去れ」から「よされ」が生まれた等々説は多い。

明治三十年以降、黒石よされは絶えたが、戦後黒石の商工会が町の発展のため、黒石よされを復活させた。昭和三十五年以降、黒石商工会議所、黒石観光協会が観光行事の一つとしてとりあげ、誰でも踊れるような現在の振り付けを行い、今日に至っている。

民俗文化財 上十川の追分石

所在地 黒石市大字上十川字北原一番三八
所有者 派立二・三町内



高さ 一〇七cm
幅 二一cm
奥行 二一cm
石英安山岩

(正面)
従是
右ハ 長谷沢不動海道
左者 青森海道

(裏面)
正徳四甲午年六月廿八日
養是院

県道浪岡北中野黒石線の長谷沢神社入口前に追分石が建っている。

この石塔は、正徳四年（一七一四）六月二十八日、養是院（長谷沢に住みついた修験者）によって建立され、黒石から青森方面または長谷沢神社方面へ向かう道標である。この追分石がある県道浪岡北中野黒石線は、黒石から青森方面へ向かう主要な道路であり、他方、長谷沢神社は古くから津軽三不動の一つで多くの参拝者が往来した。また、長谷沢への道は日蓮宗の聖地法峠へ通じる道でもある。

追分とは道の分岐点をさす言葉であり、そこから集落の出入口や分岐点に建てられる石を追分石と呼ぶ。出入口に建てられた石碑は、賊や病気などの侵入を防ぎ守るという意味があるが、分岐点に建てられる石碑は、道案内の標識として建てられる。

追分石は津軽地方で四十二基が確認されている。その大半は弘前・黒石周辺に集中しており、黒石市内では二十四基が確認されている。また、江戸時代中期から後期には「北方警備」や湯治客、巡礼等の増加に伴い、追分石の建立が盛んになった。

この追分石は、津軽最古のものであり、加えて、津軽の近世交通史や民間信仰史を研究する上でも貴重な史料である。

民俗文化財 薬師寺の石敢當碑

所在地 黒石市大字温湯字鶴泉一二一四
所有者 薬師寺



(正面)

石
敢
當

高さ
九二
cm

幅
六一
cm
玄武岩質安山岩

薬師寺の境内入口手前に、あまり大きくはないが力強い風貌の石碑がある。表面には、深く大きく「石敢當」と彫られている。

石敢當とは、中国からおこった除災招福の民俗信仰である。邪気を食い止め、追い払う力があるとされ、特に災厄を除くためこの三文字を石に刻み建立する。主に道路の突き当たりや橋のたもと、家の門口などに建てる。この風習は、まず沖繩や鹿児島方面に伝わり盛んに建立された。これらの地方では「いしがんとう」と呼ばれているが、「せきかんとう」とも読む。関東以北では秋田県の十五基と本県の四基を例外に東京都・埼玉県・山形県に一〜二基ずつ散見される程度である。県内では、ほかに弘前市に一基、平賀町に二基が確認されているが、出所が明らかなのは、薬師寺の石敢當のみである。

薬師寺の石敢當は、文政六年（一八二二）に弘前藩の表医師である三上隆圭が、慈雲院の境内（弘前市新寺町・現弘前高等学校）に建立したものである。その後、慈雲院が廃寺になった際、同じ黄檗宗である薬師寺に移転され今日に至っている。

東北では最大の大きさを誇り、昭和六十二年（一九八七）に函館市内に石敢當碑が建てられるまでは、国内最北に位置する石敢當であった。

民俗文化財 赤坂の庚申塔

所在地 黒石市大字赤坂字東池田一五三
所有者 赤坂町内



高さ 一三八 cm
幅 三七 cm
奥行 一五 cm
石英安山岩

(参考図)





竹鼻の青面金剛童子像

赤坂にある八幡宮は、菅田別尊（ほんだわけのみこと）を祭っている。この境内に、寛政九年（一七九七）七月二十二日に建立された庚申塔（こうしんとう）が一基ある。この庚申塔の表面には、青面金剛童子（しょうめんこんこうどうじ）が彫られている。その姿は、三ツ目で六本の腕を持っている。また、足下には二人の持者と二羽の鶏鳥、三匹の猿を従えている。これを「三眼六臂 二持者 二鶏三猿」といい、典型的な青面金剛童子の像である。

青面金剛童子とは病魔や悪鬼を取り払う強力童子（こうりきどうし）であり、怒りのため全身が燃え、赤を通り越して青い顔をしている。また、庚申の三尸（さんし）駆除の利益（くじよ）があることから、庚申信仰の本尊とされている。

一般に初期の庚申塔は彫刻像が主流であったが、費用が多くなると彫刻の技術もむずかしいことから、次第に文字を彫る庚申塔が増えた。

市内には九十一基の庚申塔が存在するが、青面金剛童子像が彫刻されているのは、本件と文化八年（一八一）八月に建てられた竹鼻八幡宮の二基だけである。

民俗文化財 竹鼻の五庚申塔

所在地 黒石市大字竹鼻字宮元三五二一

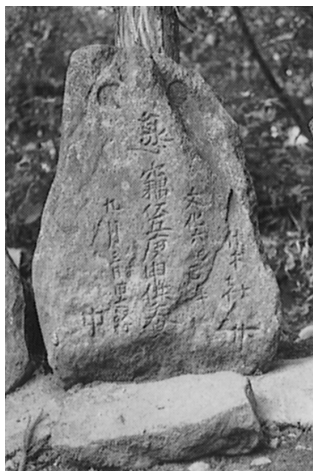
所有者 竹鼻敬神会

高さ 七二cm

幅 四八cm

奥行 四五cm

安山岩



以

以五庚申供養

文化
年

佐々木□□

九月三日田之沢村

中

竹鼻の五庚申塔は、黒石藩が誕生した文化六年（二八〇九）九月三日、田之沢村で建立された。田之沢村は竹鼻集落の東側、現在の浪岡町本郷地区に所在していたらしい。しかし明治には廢村となり、住民が竹鼻村に移った際に、この碑も竹鼻の八幡宮へ移されたという。

庚申信仰とは、眠ると体内から三尸さんしという虫が抜け出して天帝にその人の悪事を告げ、その人の寿命を短くするから一晩中寝ないで起きていなければならぬ日で、六十日に一回巡ってくる。この庚申の日は、年に六回が一般的であるが、閏年うるうどしの関係で五回の年と七回の年がある。そこで、五回ある年を「五庚申」、七回ある年を「七庚申」という。また一般に、五庚申の年は凶作で、七庚申の年は豊作であるとされ、五庚申の年には豊作祈願、七庚申の年には豊作に感謝して、碑を建てる習わしがある。この碑を「五庚申塔」、「七庚申塔」という。

津軽地方では約千七百基、黒石市内でも九十一基の庚申塔が確認されている。その九割が五庚申または七庚申の年に建てられているが、「五庚申」と刻字されているのは、竹鼻八幡宮の一基だけである。

民俗文化財 竹鼻の廻国納経塔

所在地 黒石市大字竹鼻字宮元三五二一
所有者 竹鼻敬神会

高さ 八六cm
幅 二九cm
奥行 二五cm
安山岩



(左 面) (正 面) (右 面)

施主當村道
乘田安兵衛
同内室

天下和順 正徳四_午歳 二世

奉納中供養 六_十部

日月清明 二月廿五日 安樂

同行一蓮

常陸國鹿島郡長津庄□□□□
羽笏米沢置賜郡轟村宗代白善法師
上総國天羽郡富津天神山了性白道
下総國岡田郡横曾根村長野善兵衛
常陸國鹿島郡長津庄堀木權兵衛

武芴江戸下谷天神下町鈴木清三郎久重

面) 武藏國江戸京橋弓町田中五右衛門清春

(裏) 下野國日光山 和氣安兵衛國重

相鎌倉上藏田村厭蓮社欣永源大徳

竹鼻かいてくのうきょうとうの廻国納経塔しやうとくは、正徳四年（一七一四）二月二十五日、竹鼻村の乗田安兵衛夫妻によって建立された。どのような経緯で建立されたものか明らかではないが、施主である乗田安兵衛は、この後「百観音碑」の建立にも関わっていることから当時の竹鼻村の豪族であると思われる。このほかに廻国に関わったと思われる関東地方九人の人名が刻まれている。

「廻国納経塔」とは、大乘妙典と呼ばれる法華経を六十六部書写し、全国六十六か国の霊社霊仏に一部ずつ納経するため国々を廻ったこと、または廻っていることを銘文にした碑である。また、廻国の行者のご利益や縁にあやかり、土地の人が協力者（施主・世話人）となって碑を建立することもあった。この廻国の修行者を「六十六部廻国聖」、略して「六十六部」または「六部」と呼んだ。彼らは廻国の途中、村の堂庵に定住することもあったという。

廻国納経塔は、津軽全体でもわずか五基しか確認されておらず、その中でも竹鼻にあるこの碑は、津軽最古のもので貴重である。

また、このほか市内には文化三年（一八〇六）信州（長野県）行者大助建立、世話人種市久六の「廻国納経塔」が馬場尻墓地にある。

民俗文化財 竹鼻の百観音碑

所在地 黒石市大字竹鼻字宮元三五二一
所有者 竹鼻敬神会

高さ 八〇cm
幅 二八cm

奥行 二七cm
安山岩



(右 面)

正徳四^甲年
歲八月吉日

(正 面)

奉巡禮西國秩父板東

南無観世音菩薩

奉供養石塔為二世安樂

白 敬

(左 面)

願主

乘田安兵衛
林助左衛門
井戸庄兵衛

江戸時代元禄以後、お伊勢参りをはじめとする寺社参りが盛んになり、各地に三十三番札所が設けられた。その中でも西国・坂東・秩父の三国百番巡礼が最高とされたが、長期間の日数と莫大な費用を要するため、かなり裕福な者でなければ巡拝できなかった。そこで巡礼の記念に「百観音碑」を建立し、お参りにいけなかった人がこれを拜むことで百観音参りのご利益に授かることとした。

竹鼻の「百観音碑」は、正徳四年（一七二四）八月、竹鼻村の乗田安兵衛を含む三名が願主となつて建立した。乗田安兵衛は同年「廻国納経塔」を建立しており、この影響を受けて林助左衛門、井戸庄兵衛とともに巡礼したものと思われる。三人の間柄については不明である。

津軽地方では、このほかに市内上十川、平賀町、大鰐町に一基ずつ確認されているのみであり、その中でも竹鼻の碑は最も古い碑として、大変貴重なものである。



〈竹鼻八幡宮〉

竹鼻の八幡宮は、延宝三年（一六七五）に竹鼻村中に建立されたと伝えられているが、詳細は不明である。文化十三年（一八一六）六月に堂社を再建している。誉田別尊を祭神としている。

本殿に通じる参道の側には、「五庚申塔」、「百観音碑」、「廻国納経塔」が建立されており、いずれも由緒があり黒石市文化財に指定されている。このほかにも、庚申塔が立ち並び、信仰が盛んであったことがうかがえる。



民俗文化財 獅子が沢のしし石

所在地 黒石市大字上十川字

長谷沢二番囲八〇―六

所有者 上十川財産区

上の石 高さ 一・〇七m 幅 一・七m

(小) 奥行 〇・七m 石英安山岩

下の石 高さ 一・六m 幅 二・六m

(大) 奥行 二・三m 石英安山岩

長谷沢の上流地域に、通称「獅子が沢」とよばれている場所がある。その場所には鹿の頭を彫った石があり、古くから地元の住民はこの石を「しし石」と名付け、その場所を「シシア沢」と呼んでいる。



しし石の拡大写真

このシシという呼び名について、郷土史家佐藤雨山は、『黒石風土記―北黒石の巻―』で次のように述べている。

「シシというのは、シシ踊の衣裳のシシ頭を指すので、俗にいうシシコ面である」

つまり、「しし石」の「しし」は、「獅子」ではなく「鹿」であると述べている。この著書をはじめ『勝地浅瀬石川』で、「獅子が沢のしし石」の規模・由来・それに伴う伝説など詳しく説明している。また、佐藤雨山は上十川の獅子（鹿）踊が、この「しし石」と係わりを持つことに触れている。しかし現在のところ、この件に関しては解明されていない。

「獅子が沢のしし石」が最初に文献で紹介されたのが、菅江真澄の『追柯呂能通度』である。

菅江真澄は、三河出身の紀行家・民俗学者で、

本名を白井秀雄という。彼は、信濃・東北・北海道を遊歴し、その様子を日記やスケッチ画に綴った。『追柯呂能通度』は、津軽を訪れたときの様子をまとめたもので、寛政十年（一七九八）の作品である。全二十二丁、図絵二十一図から成り、その中に二枚の「しし石」の絵がある。そして「しし石」について、次のように述べている。

「……（中略）……めぐりは五尋六尋斗の岩の面に、鹿の頭の大なるも、ちいさきも、いくはくとなうひしひしとほりたる。」

このことから「獅子が沢のしし石」は、寛政十年よりも古い年代に存在していたことがわかる。しかし、いつ作成されたかについては不明である。

この「しし石」は、大きい石と小さい石の二基から成る。大きい石には八頭分の鹿の頭が、小さい石には、二頭分の鹿の頭が彫られている。また、小さい石の左下部に「上十川村」と文字が彫られているが、この文字は、明治二年（一八六九）に弘前の石切が彫ったといわれている。

石に鹿の頭を彫る意義について佐藤雨山らが述べているように、木こりの間に侵透していた山子芸術の一種とか、鹿を供養するためのもの、上十川の獅子（鹿）踊に関連して踊りに使い古した鹿頭を埋めたのではないだろうかという説がある。また「またぎ」の研究者である愛知大学教授千葉徳爾の話では、全国各地にしし頭を埋める風習があり、それをしし塚というが、この類ではなからうかと語っている。しかし、いずれも推定だけで明確な意義については説明されていない。

このように、しし石の彫刻年代やその意義について不明な点が多いが、県内には類例がなく全国的にも希少な文化財である。



菅江真澄のスケッチ画

民俗文化財 馬場尻の庚申塔

所在地 黒石市大字東馬場尻字馬場尻一
所有者 馬場尻八幡宮



高さ 八五 cm
奥行 二〇 cm

幅 二五 cm
石英安山岩



(拓本)



(正面)

凡 乃 丁 可 丑 九 丑 丑

抑此塔旨趣者大施主道師

文覺

庚申也万歳之□奉拜今日既成就乎是以為展供養請護法筵□隨分

□□淨土仏并真文十部□□□□□□誠是現当二世妙藥也剩奉造



立一申塔婆身是大日如来内証法仏成道輒則是王正位源座者
受護持施主□□塔現世壽命□□滅当来□仏類鴻王之尊位仍

(右側面)

三界万靈有縁無縁

(裏面)

元文五年八月廿二日

(左側面)

乃至法界平等利益

馬場尻の八幡宮境内にあるこの庚申塔は、元文五年（一七四〇）八月二十二日に馬場尻村の藤治郎ほか八人が創建したものである。

庚申信仰とは「六十日に一回まわってくる庚申の日に眠ると、体内から三戸さんしという虫が抜け出して天帝にその人の悪事を告げ寿命を短くするから一晩中寝ないで起きていなければならない。」とされ、本来は延命長寿の信仰であった。しかし、いつのまにか農民は豊作を、商人は繁昌を、病人は回復を祈るようになつた。

この庚申塔の碑面には、庚申信仰の由来等がいつぱいに彫り込んである。このような庚申塔は他に類例がなく、非常に貴重なものである。また、石碑文の一部に梵字を用いていることも珍しい。市内に九十一基ある庚申塔の中では最も古く、津軽地方の千七百基の庚申塔の中でも六番目に古いものである。

民俗文化財 法眼寺の砂踏之碑

所在地 黒石市大字山形町八二
所有者 法眼寺

高さ 一二〇cm 幅 四七cm 奥行 二九cm

石英安山岩



(正面)

(右面)

寛延四辛未歳四月十七日建焉施主当人
同加藤貴孝

寛延三庚午天四月下浣西村四郎兵衛妻
恭順礼西国三十三所而其堂下之土地手持
来而埋却此盤石之下而永令人結勝縁
若人発心而一踏一礼則不動寸步既西国
三十三所順礼之功了者也



ほうげんじ
法眼寺本堂の東側、開山堂の側には砂袋が円形に敷かれており、その円の中には石碑が建てられている。

法眼寺の砂踏すなふみの之碑のひは、寛延四年（一七五二）四月十七日に建立されたものである。銘文には裕福であったと思われる黒石の西村四郎兵衛の妻が西国十三か所の巡礼をし、巡礼先のお堂の下から砂を持ち帰ったことが記されている。

巡礼に行けなかった人は、その一つ一つに足をかけて本霊場に立ったと同じ気持ちで御詠歌を奉読し、そのご利益にあずかった。

西国霊場十三か所巡礼の碑としては、県内唯一のものであるとともに、観音信仰の実体を調査する上でも大変貴重な石碑である。